

### 杉戸町記者発表資料

- 令和8年4月24日(金)
- 担当課名 社会教育課
- 担当者職名 主幹 氏名 守谷 健吾  
主事 氏名 村上 博美  
主事 氏名 篠崎 彩乃
- 電話番号 0480-33-1111 (内線483)
- 17時15分以降 0480-33-6476 (直通)

## 杉戸町の文化と歴史を再発見！ 『Sugito GRAPHICA vol.04』を刊行しました

『Sugito GRAPHICA』・・・杉戸町の伝統文化・歴史等を写真や図で紹介している郷土誌。  
2023年に創刊後、毎年刊行しており、2026年3月に刊行  
した今回が第4号となります。

### 概要

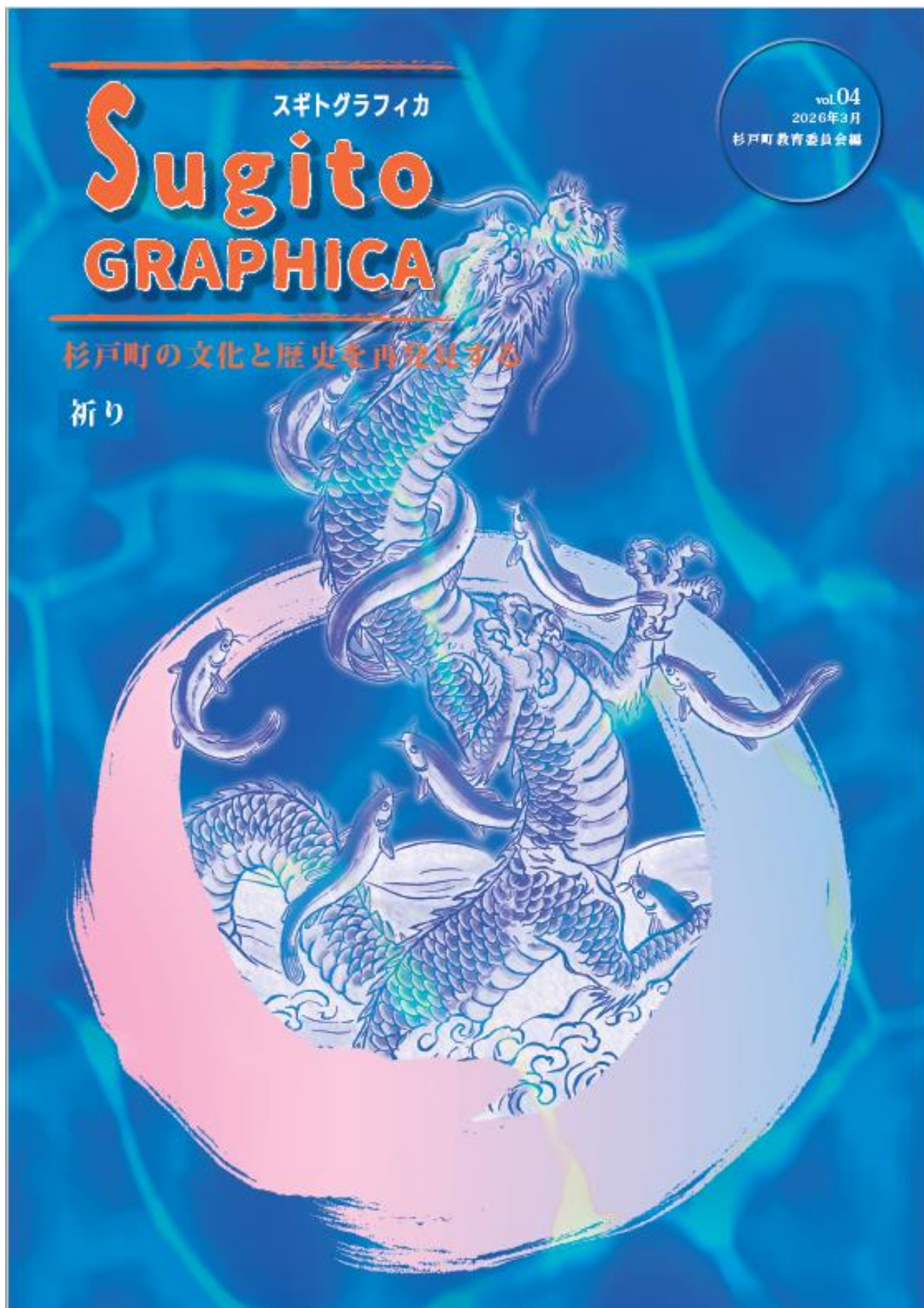
- 内容等** 本号では、毎年8月22日・23日に<sup>りゅうとうざん えいふくじ</sup>龍燈山永福寺にて開催されている「どじょう  
<sup>せがき</sup>施餓鬼」を取り上げました。  
時代とともに社会が激変し、儀礼の表面的な機能が変化しようとも、600年前から  
地域に根付く変わらぬ「祈り」をテーマとして紹介しています。  
杉戸町の文化と歴史を再発見する一助としていただくため、ご希望の方には無償で  
配布を行います。
- 配布場所** 杉戸町役場社会教育課窓口（第一庁舎2階、教育委員会内）  
エコ・スポいずみ 文化財展示室  
カルスタすぎと  
ココティすぎと

### その他

- 【別添資料】 表紙、中身（見開き抜粋）
- 【取材対応】 取材を希望される報道各社の方におかれましては、記者発表担当者（本紙上欄の  
電話番号）まで御連絡ください。

表紙

どじょうが龍に似ているところから、どじょうの背中に乗ってご先祖様が極楽浄土へ旅立つためにどじょうを池に放すという、「どじょう施餓鬼」の由来をイメージした表紙です。



# 見開き 1

## 聖と俗、二つの引力

Attractors, why the heart is drawn there.

毎年8月22・23日、埼玉縣杉戸町の龍檀山縁福寺で、関東三大地蔵霊の一つ「どじょう地蔵霊」が祭られます。宗派を問わず先祖の霊を供養し、どじょうを池に放つ、自らの死と向き合い、命の再生を願い、中世から続く伝統的な儀式です。

この物語の原典は、縁福寺に由来する『龍檀山伝説』です。そこに記された説話の核心は、復活した父と、その父を見捨てず冥府にまで追って教を出す子の物語。すなわち「孝の物語」にはなりません。

物語の舞台は、中世の杉戸という「境界の地」です。鎌倉街道の震津に位置し、奥州の入り口にあたるこの要地に君臨したが、守護四幡前司長福朝臣でした。守護とは、因幡國の守護の職にあった長福への敬称です。

長福は下河辺庄高野に入り城を築きました。「大地」と「武力」を支配する世俗の御主であり、目に見える力だけを信じる、傲慢な現実主義者でもありました。

長福には一子があり、後に藤王と称しました。彼にこの少年は、「水」と「霊性」を種立ちする聖なる信信と名づけます。信名を日尊といいます。

この物語は、決して交わるはずなかった「聖と俗」、父の傲慢と子の慈悲が、ある悲劇的な「事件」を契機に、断絶を超えて再び結ばれる「魂の救済」の物語でもあるのです。

長福は次第に憔悴していき、病に倒れ、遊び帰朝け暮れました。領主の務めは放棄され、軍は純粋を失い、田畑は荒れるにまかされました。民の暮らしなどもやみくもなこともなかったのです。

父の乱行を深く憂えた藤王は、ついに信世を捨てて決意を固めます。十六歳にして剃髪し、日尊と改め、比叡山に登って修行に入りました。

日尊が修行に励むある夜、不思議なことが起きました。芳香が漂ち、紫雲が捲いて西天を覆ったのです。すると天女の姿が現れました。天女は告げました「我が母なり」と。亡き母は、父・長福の悪業が日々増長し、地獄の苦輪がまきまき迫っていることを涙ながらに伝えました。その後、日尊は高野の地に降り、長福を連れて荒廃した阿彌陀寺を再建しました。

事件は、長福による「聖域の侵犯」から始まります。ある日、長福は阿彌陀寺の山門前の橋の上を、馬に乗ったまま駆け抜けました。これは、世俗の祭儀（馬・

武力）が、聖なる聖域（寺・仏法）を踏みしめる行為であり、当時の社会秩序に対する重大な「穢れ」であり挑戦でもあったのです。

その穢れは、物理的な「転落」として現れます。嵐が吹き上がった拍子に、長福は墜落しました。このとき目撃した信信もなく、一瞬は安堵したといえます。しかし瞬時に悔った後、突然の高熱に襲われ、正気を失ったまま息絶します。さらに、彼の死は自然界のバランスを崩し、嵐の嵐が吹き荒れ、暴風雨が吹き、重たい雨と川の増水により、長福の墓所は崩壊しました。嵐が吹いて水が溢れ、御木は倒れ、民家は壊れました。翌日、人々がその惨状を目にしたとき、墓所の跡には御木が残されているばかりでした。

人々はこれを長福の悪業、生霊の悪業がもたらした天罰と噂し、この池を「因幡池」と呼ぶようになったのです。

ここに決定的な「転落」が完成します。地上を支配者であった長福は、死してなお安息の地さえ奪われました。墓所は荒れ地に奪われ、その名は荒廃の池として記憶に刻まれたのです。武力も悪業も、もはや何の意味も持ちません。

領主の魂が形に消えたとき、地域社会は断絶に陥りました。「水」は恵みの源であると同時に、一度呑まれば二度と解れない「冥界（この世ならざる場所）」でもあるのです。

長福の首領を受けた日尊は深く悲嘆し、日夜、齋戒を守りました。そして、修行先で日尊が過酷に修行していたとき、奥知して冥界に冥府へと導かれました。自らの意志による「足」ではありません。修行の力がある境界を超えた瞬間、冥府の扉が開いたのです。

そこで日尊が目にしたのは、壮絶な地獄でした。冥府の法廷の奥、高々と据えられた玉座に、閻魔大王が坐していました。その顔は、地獄の鏡さまだと見えぬほど悪く、一切の嘘を許さぬ威厳に満ちていました。左右には冥府の判官、紅・青・黒・白、四色の袈裟に冠を戴き、腰刀にせず立ちまわっていました。

大王は日尊に告げました。「我が父は、八熱地獄にある。名付した無量無数の罪人がその中にあり、阿鼻・無間の中であつて猛火が燃焼し、悲鳴の叫びは世の如く天に響いている」と。

しかし大王は、日尊の「孝の心」に深く感入りました。父を救いたいという一念、その誠意の力が、冥府の扉をも動かしたのです。大王は言いました。「善いことだ、上人よ。朕にはこの法がある。これを汝に与えよう」と。

こうして閻魔大王から直接授けられたのが、「長福御霊の御秘法」と呼ばれる地蔵霊の秘法でした。これは、みだりに人に授けずはならぬ秘法です。

# 見開き 2

## 600年目の鼓動

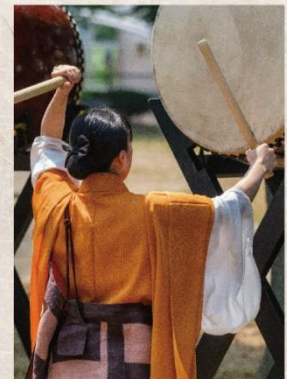
The next six hundred years are already underway.



因幡池の周囲に太鼓の音が響きます。重い打音と軽妙な打音が交互に重なり合い、夏の空気に強い衝動を与えます。この「太鼓の演奏」は、平成23年、東北を襲った東日本大震災への鎮魂を込めて始まりました。打ち鳴らされたその音は、600年の法に新たな一歩を加えることとなりました。同時にそこには、薄れぬ信仰心とともに年々人々の心が通ってゆくこの行事に、再び強い心を呼び戻したいという切実な願いも重ねられてゆくのかも知れません。

打ち手の中心は若い僧侶たちです。パシを高く振り上げ、全身で皮面を叩くその姿は男社士といふほかありません。資料の記録とは対照的に、身体そのものを楽器と化すかのような意図がそこにはあります。

参詣の人は、その音を全身で受けとめます。大気の振動が汗はむ肌を包み、心を揺さぶります。8月の鼓動のなか、顔を伝う汗すら乾か



気がつけば、どじょうの養生を先守っていたときはまったく異なる感覚が自分の身に生まれていることに気づきます。地蔵霊という法が本来有る死者への指向と、震災という生々しい喪失の記憶とが、太鼓の「打ごと」に重なり合い、聴く者の奥底で何か静かに響きはじめます。それは言葉にはならない、音が身体を貫くことで初めて目を覚ます感情です。

古い行事が時代の狭間で衰退の途にあるとき、それに強い響きとめようとする試みは往々にして外側から強制されるものです。しかし、600年という時の試練を乗り越えてきたこの「どじょう地蔵霊」には、何も頼むと人の心に響く力が宿っています。

この「太鼓の演奏」もまた、鎮魂という業に深く根を下ろしているからこそ、その音は、真夏の空の下、まっすぐ響き渡るのです。